

あと 30 センチ

教室で帽子をかぶったままの子どもがいれば、

マナーがなっていないと見える。

「部屋では帽子をとろうね」とやさしく指導したりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、

帽子の下のその子のこわばった顔が見えたかもしれない。

ああ、この子はこんなにおびえていたのか。

そう感じられたなら、

その子が安心できる教室をどうにかしてつくってゆきたくなる。

教室でうなり声をあげる子どもがいれば、

「障害」があると見える。

ほかの子どもから離して職員室で自習させたりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、

脇をぎゅっと固めて暴発を必死に抑えようとするその子の姿が見えたかもしれない。

ああ、この子はこんなにくらえていたのか。

そう感じられたなら、

「よくがまんしたね」とみんなの前でその子を承認したくなる。

教室で規律を守り、勉強もできる子どもがいれば、

なんの「問題」もないと見える。

「ほんとうに手のかからないお子さんで」とほめそやしたりする。

しかし、あと三十センチ近づいていたら、

いつでもどこでも同じ笑顔の向こうからその子の叫びが聞こえたかもしれない。

ああ、この子はこんなに感情を押し殺しつづけていたのか。

そう感じられたなら、

その子がやさぐれた台詞をぶちまけられる音読の授業に挑みたくなる。

あと三十センチ。

しかし、それがやけに遠いのだ。

自己を防衛し他者を操作する技術の鎧を身にまとうことが

「有能」と見なされるこの時代、

わたしたちはその鎧を脱いで肌をさらそうとしないかぎり、

ふれることも、ふれられることもできない。

たとえ「未熟」でも、相手にふれ、ふれられる肌の感触のほうから、

その子どもの葛藤や格闘に応える学びを共に探り合ってゆくこと。

あと三十センチで生まれるコンタクト。

教育の場はそこを起点にしてあらゆることを問い返す、

探求のるつぼであっていい。

もっと子どもを語ろう

もっと子どもを語ろう。

あれができない、これができないじゃなく、

その子どもがなにを超えようとしているかを。

もっと子どものいまを語ろう。

その子どもが歩んだこれまでを思い返したり、

その子どもが迎えるこれからに思いを馳せながら。

もっと子どもと向かい合う自分を語ろう。

その子どもを語ることは自分を見つめ直すこと、

その子どもを語り直すことは自分を問い直すことなんだから。

もっと子どもの葛藤や格闘を語ろう。

そこに私たちおとなのものの見方が影を落とし、

そこに私たちの社会の矛盾が編み込まれているのだから。

もっと子どもに応える教育を語ろう。

子どもたちみんなに施すことではなく、

その子どもに応えることに教育の意味を見いだそう。

そこからしか、その子どもの教育ははじまらない。

そのなかでしか、その子どもの教師にはなれない。

もっと子どもを語ろう。

その子どもを語り直しつづけるおとなこそが、

その子どもの学びの道連れになれるのだから。

小さな出来事を大切にしたい

小さな出来事を大切にしたい

そこに思いをかけた人にしか

生きることのできない現実を

小さな出来事に感動したい

そこに生まれたしあわせを

からだの底から祝福したい

小さな出来事を辿り返したい

そこに至るまでのプロセスも

それを支えた人たちの思いも

小さな出来事は自立の足場だ

大きな言語にぐらつく自分を

目の前の事象に立ち返らせる

小さな出来事は実践の土壌だ

それらの時の重なりの中かで

私が変わり、私たちが変わる

小さな出来事は生涯の記憶だ

ふとしたときに思い起こされ

その時の自分に息吹を届ける

小さな出来事を分ちあいたい

それを並び見る間柄のなかで

教育の意味を問いつづけたい